

パール、デンマークの治療薬 : Pearl : Remedy for Denmark

著者	吉野 有紀子
雑誌名	文学研究論集
号	22
ページ	23-42
発行年	2004-03-31
その他のタイトル	Hamlet : A Pharmakon of Denmark
URL	http://hdl.handle.net/2241/10255

パール、デンマークの治療薬

Pearl: Remedy for Denmark

吉 野 有紀子

1. はじめに

シェイクスピアの『ハムレット』(1601年)は、主人公ハムレットを含むデンマークの王家一族が減びるところで幕が閉じる。この悲劇的な結末には、『ハムレット』に充満する病や死のイメージが密接に関わっているものと考えられるが、このイメージはもともと、1930年代にウィルソン・ナイトやキャロライン・スパージョンによって指摘されたものである。

「死の使者・『ハムレット』論」においてナイトは、『ハムレット』のテーマを死とみなし、ハムレットの病が共同体の死をもたらすと考え。彼は、もしハムレットが病気に蝕まれていないならば速やかに復讐を遂げ、クローディアスのような国王になっていたはずであると推測する。そして、健康的な人物までハムレットの病気に感染して死に至るのであり、ハムレットがすべての悲劇の元凶となっているとされる。ナイトによれば、ハムレットは「存在しているだけでデンマークの幸福と健康に病毒となり脅威」をもたらすという、生に忍び寄る「死の使者」なのである(60、96)。

また、スパージョンは、他のシェイクスピア劇と比べて『ハムレット』には病気のイメージが多く用いられ、とくに「潰瘍“ulcer”、腫瘍“tumour”という観念がデンマークの不健康な状態を表すものとして支配的である」ことを統計的に示している (Spurgeon 316)。

[Shakespeare] sees it [the problem in *Hamlet*] pictorially *not as the problem of an individual at all, but ... as a condition for which the individual himself is apparently not responsible, any more than the sick man is to blame for the infection which strikes and devours him, but which, nevertheless, in its course and development, impartially and relentlessly, annihilates him and others, innocent and guilty alike.* (Spurgeon, 318-319, emphasis original)

スパージョンは、個人に責任があるのではなく、病の進行によって、罪ある人も罪なき人もみな滅びることになるというように、病気のイメージが『ハムレット』の悲劇を形成するという解釈を決定的なものとしたと言える。

とくに、『ハムレット』に病や死のイメージが浸透しているという彼らの説には、「死を思え」“*memento mori*”の思想がルネッサンス期に普及していたことから、異論の余地はないと思われる。¹ したがって、ナイトやスパージョンの議論から、国王の死は、ハムレットの復讐遂行の成果というよりもハムレットの病が感染した結果であり、それによって共同体の死も同時に導かれると言える。

しかし、ハムレットの病が、結果的にデンマークの宮廷を全滅させるという死のイメージだけで、『ハムレット』を捉えることはできない。たとえば、シェイクスピアの『ハムレット』に強い影響を与え、その内容に多くの類似点が指摘されているトマス・キッドの『スペインの悲劇』（1589年）の結末が、『ハムレット』の結末と決定的に異なることに注意を向けたい。² 『スペインの悲劇』においては、ヒエロニモが復讐を遂げた後、年老いた国王をひとり残してその王位継承者は全滅してしまう。つまり、『スペインの悲劇』は、スペインという共同体の存続の危機が示唆されて幕を閉じるのである。一方、『ハムレット』では、デンマーク王家一族の断絶と同時に、ノルウェー王子フォーティンブラスがデンマークの国王となる。³ 一幕では無骨者として描かれていたフォーティンブラスだが、最終場までに、理想的な国王となるに相応しく、理性と熱情をバランスよく兼ね備えた人物に成長していることは注目されるべきであろう。⁴ つまり、『スペインの悲劇』とは対照的に、『ハムレット』は、健康的なフォーティンブラスの登場によって、デンマークの秩序回復が示唆されて幕が閉じるのである。

ハムレットは、息を引き取る前に“I do prophesy th'election lights / On Fortinbras. He has my dying voice” (5.2.360-361) ⁵ とフォーティンブラスを次期国王として支持する意思を表明する。このハムレットの推挙によって、フォーティンブラスの“rights ... in this kingdom” (5.2.394) は正当と考えられ、彼がかつて腕づくで (“by strong hand” [1.1.105]) 土地を奪還しようとした時のように、暴力的に王座を奪うのではないことが明らかになる。ハムレットは、デンマーク王家最後の最高責任者として、デンマーク国家が存続するように王権を橋渡しするのである。この点で、ハムレットは、「死の使者」というよりも、むしろ死に瀕したデンマークを再生に導いている。

本稿では、ハムレットがデンマークに死をもたらすのではなく、その再生に貢献すると考える。デンマークの病の原因がハムレットではないとすれば、何が原因に

なっているのだろうか。そして、死に瀕するほどの病に冒されたデンマークが、起死回生をはかる具体的な契機はいったい何か。病の治癒に必要なものは、病の元凶を探ることと、有効な治療薬を服用することである。そこで、デンマークの病の原因を検討し、その病を治すために処方される薬を明らかにすることを試みる。

2. 〈庭〉における殺人

『ハムレット』の悲劇は、亡霊の出現で始まる。先王ハムレットの亡霊は、彼がクローディアス国王に暗殺されたという真相を語り、復讐を命ずるために息子ハムレットの前に現れる。亡霊がハムレットに与える情報によれば、先王が自分の庭で昼寝をしている最中（“Sleeping within my orchard” [1.5.59]）に、クローディアスが彼の安全な時間を突然奪った（“my secure hour thy uncle stole” [1.5.61]）という。そして、亡霊は、庭で午睡中の先王ハムレットの耳にクローディアスが毒薬を注いで暗殺した様子を仔細に説明する。

ここで注目すべきは、クローディアスによる先王暗殺の場として国王の私的空間が設定されていることである。シェイクスピアが『ハムレット』の材源として直接参考にした可能性が高いフランソワ・ド・ベルフォレの物語では、先王殺害は酒宴の場で行われ、しかも王位を篡奪した国王の行為は公然の事実となっている。⁶ 一方、シェイクスピアの『ハムレット』では、先王暗殺は酒宴の席のような公的な場ではなく、庭という私的な場において行われ、しかも真実が歪曲されて世の中に伝わっている。ここでは、先代ハムレットが殺害される空間のイメージを確認しながら、国王クローディアスの行為が、先王にとっていかに “Rankly abus'd” (1.5.38) であり、デンマーク宮廷を毒で汚染することになるのかを検討したい。

先王ハムレットは彼の “orchard” で殺害されるのだが、OED によれば、“orchard” とは “garden for herbs and fruit-trees” である。テューダー朝期の庭は、煉瓦塀に囲まれた果樹園庭園であったと川崎寿彦が指摘しているように、この “orchard” もそのような果樹園庭園であると考えられる。⁷ すなわち、先代ハムレットが殺害される空間には、花や果物などの植物が生まれ育つ生としてのイメージが伴う。ところが、そのような恵み深い空間で寝ていたところ（“sleeping in my orchard” [1.5.39], “Sleeping within my orchard” [1.5.59]）、先王は侵入者による急襲を受け殺害されてしまう。つまり、果物が結実する生としての “orchard” が、突如として、死の場へと変貌するのである。

ここで、“orchard” を塀に囲まれた〈庭〉として解釈すれば、先代ハムレットの “orchard” が彼の私的空間であったことが強調されるだろう。たとえば川崎は、伝

統的な〈庭〉について、「プライベートな小空間」であり、「その中で、平穏なひと時が保障されている」と定義している(3)。とくに、18世紀になるまで、「^{ウエール・ペルベトウーム}囲われていない庭というものはな^{ローグス・アモエス}く、高い壁に囲まれた庭の内部は〈常^{ウエール・ペルベトウーム} 春の国〉であり、〈好ましい空間〉であった(川崎 23)。事件の状況について語る亡霊は“my secure hour thy uncle stole”(1.5.61)としているが、オックスフォード版の編者 G. R. ヒバードによれば、“secure”とは、“over-confidently free from apprehension”を意味する(Hibbard 1.5.61 註)。クローディアスは、平穏なひと時が保障されている「プライベートな小空間」としての〈庭〉で、先王が完全に安心しきっている時間を突然奪ったのである。高い壁に囲まれた〈庭〉は、午睡を楽しむ先王にとって何ら安全な空間ではなくなり、その殺害を企む侵入者クローディアスにとっての安全な空間となってしまう。

ところで、先王ハムレットは、伝統的な騎士道精神を尊ぶ国王として描かれている。亡霊は、先王崩御の時と同様、甲冑を頭からつま先まで身に着けた(“Armed at point exactly, cap-a-pie” [1.2.200]) 騎士の姿で現れる。また、先王は、かつて、ノルウェーの国王と一騎打ちをして勝利し、騎士道の掟(“law and heraldry” [1.1.90])に従ってノルウェーの領土を手に入れた経緯が語られている。一方、まさしく不意打ちで先王を殺害するクローディアスの行為は、非常に卑劣で暴力的である。クローディアスは、お互いに命をかける騎士道的な戦いを先王に挑むのではなく、私的空間に侵入して先王が眠っているところを毒殺するという非騎士道的方法を用いる。庭での殺害を成功させることは、クローディアスが先王の“secure hour”に押し入り、騎士道とは正反対の狡猾な方法を用いて、生の場に死をもたらしたことを意味していると思われる。

さらに、シェイクスピアが『ハムレット』の先王殺害の場として〈庭〉を選んだのは、キッドの『スペインの悲劇』が強く影響していると思われる。『スペインの悲劇』では、若い恋人同士である騎士ホレイシオとペル・インペリア姫の逢引きの場として庭(“garden”)が選ばれる。果実や花々で彩られた〈庭〉は、恋人たちにとって最も好ましい場所であると同時に、庭を囲む塀が彼らの人目を忍んだ恋愛を外から守るという役割を担っていた。しかしながら、突如として陰謀を企む複数の侵入者たちが彼らを妨害する。ホレイシオは、非騎士道的に、複数によって吊るし上げられ、“These are the fruits of love”(ST 2.4.55)と言われながら刺殺される。つまり、このホレイシオ殺害は、〈常^{ウエール・ペルベトウーム} 春の国〉、〈好ましい空間〉として生の場であったはずの〈庭〉が、突然、死の結実の場へと変わる象徴的な場である。恋人たちの秘密を守る場所としての〈庭〉は、侵入者たちの犯罪の秘密を守る場へと変貌する。しかもその殺人は、報告などの言葉によって説明されるのではなく、舞台上

で演技として行われる。この場面は、当時の観客にとって、非常に衝撃的で気味の悪いスペクタクルとなったに違いない。

ジェフリー・ブローは、『ハムレット』と『スペインの悲劇』との間に、20項目の相似点があることを示している（Bullough 16-17）が、その殺害現場にも共通点が認められることについては触れていない。しかし、両作品における〈庭〉の用いられ方に、いくつかの共通点が見出されることは明らかである。第一に、前提としての〈庭〉が最も安全で好ましい私的空間である生のである点であり、第二にその生のである場が突如として死の場に変貌する点である。第三に、『スペインの悲劇』のホレイシオも、『ハムレット』の先王も、騎士道的精神を尊ぶ人物であることが強調されるが、両者とも〈庭〉において、非騎士道的な不意打ちによって殺害される点である。つまり、『スペインの悲劇』と『ハムレット』の悲劇の発端は、〈庭〉における殺人にあると言える。

ただ、『ハムレット』における先王暗殺の事件は、亡霊が語る情報にすぎず、『スペインの悲劇』のように舞台上で行われるわけではない。しかしながら、〈庭〉における殺人という亡霊の情報によって、エリザベス朝期の観客は、『スペインの悲劇』のホレイシオ殺害の場面を咄嗟に思い浮かべ、非常に衝撃的な出来事として受けとめたのではないだろうか。

また、『ハムレット』において、〈庭〉が政治的なメタファーとして機能していることは、極めて重要である。たとえば、ハムレットが世の中を厭い、自殺を考えている第一独白をみてみよう。ハムレットが憂える世界とは、父亡き後、母ガートルードと近親相姦の関係を結んだ叔父クローディアスが統治するこの世の中の状況である。

Fie on't, ah fie, 'tis an unweeded garden
That grows to seed; things rank and gross in nature
Possess it merely. (1.2.135-7)

ハムレットにとって、先王亡き後のデンマークは、除草されていない庭である。ヒバードの註によれば、“the properly tended garden was an image of the world as it should be, ordered, productive, wholesome” とある（Hibbard 1.2.135-7 註）。適切に手入れされた庭はそうあるべき世界のことであり、国王の政治が正常に機能している状態を意味する。一方、手入れされていない〈庭〉のイメージは、無秩序で生産性のない不毛の世界である。ハムレットは、先王の秩序ある政治と比較して、クローディアスの治める秩序のない世界を批判する。

そして、ハムレットは、亡霊の情報によって、先王が暗殺された事実を知ることになる。先王の手入れの行き届いた〈庭〉、すなわち、先王によって治められた秩序ある世界を台無しにしたのは、現国王クローディアスであったのである。クローディアスが先王ハムレットの〈庭〉に侵入し、〈庭〉の主である先王の耳に毒薬を流し込んだ結果、〈庭〉は本来の主人を失う。その結果、〈庭〉は、クローディアスのような悪臭を放つ植物が繁茂して荒れ果ててしまった。ここで、〈庭〉とは国王によって治められた世の中の状態であり、政治的な空間として表象されている。

〈庭〉が予期せぬ悪党に暴力的に侵犯されることで、〈庭〉の秩序は乱され、秩序が乱された〈庭〉は腐って不毛の土地となることを運命付けられる。つまり、荒廃した状態にある国家は、破滅のほか道がないことが示唆されるのである。その意味で、〈庭〉を腐らせたクローディアスの行為（庭に侵入し、午睡中の先王ハムレットの耳に毒薬を注いで暗殺した行為）は、重大な罪過として問われるべきものになるだろう。ハムレットのクローディアスに対する恨みは、父親が殺害されたことにとどまらない。ハムレットが国王として継承するはずのデンマーク国家は、現国王が自ら調合した毒薬によって、その内部が毒されてしまったのである。このように、クローディアスの暴力によってもたらされた国家の破壊に対して、ハムレットはどのような反応を示すことになるのだろうか。

3. デンマークの心臓の病

現国王が“You are the most immediate to our throne” (1.2.109) と宣言するように、ハムレットは、デンマークの次期国王となることが約束されている。しかし、彼が継ぐべきデンマーク国家は、すでに死が宣告された状態にあり、しかもそれは、現国王が〈庭〉で午睡中の先王の耳に毒薬を注いだことに端を発する。デンマーク国家の中心部、いわば、その心臓部分が毒され、全身に死の病が広まりつつあるのである。亡霊が事件の真相を語る前に、“sick at heart” (1.1.9) という語や、“Something is rotten in the state of Denmark” (1.4.90) という台詞がすでにみられるが、これらは、国家の心臓部分の腐敗を示唆するものと思われる。⁸ このように、〈心臓〉というもっとも重要な部分を冒されたデンマークの未来は暗い。そしてハムレットは、亡霊によって、国家の病の根本的な原因が現国王の毒薬にあったという事実を知ることになる。ここでは、デンマークの王位継承者としてのハムレットが、死に瀕する国家を前に、どのように考え、行動を逡巡するのかを検討したい。

まずは、ハムレットが亡霊との出会いを通して、問題視するものを検討する。亡霊が事件の詳細について語る前に、ハムレットは、“[I] May sweep to revenge”

(1.5.31)と復讐を約束していた。しかし、亡霊が話を終えて消えた直後のハムレットの台詞は、「復讐」という語をまったく欠いている。ハムレットは、現国王が〈庭〉で午睡中の先王を毒殺した事件を聞き、もはや個人的な問題ではなく国家全体にかかわる問題であることを理解しているように思われる。その意味で、“The time is out of joint. O cursed spite, / That ever I was born to set it right” (1.5.196-197)という台詞には、ハムレットの意思表明を読み取ることができるだろう。ここでハムレットが嘆く彼の責務に対し、ケンブリッジ版の編者フィリップ・エドワーズは、そのイントロダクションで適切な問いを投げかけている。

This is a terrible moment as, all exhilaration gone, he faces the burden of his responsibilities. But who has told him that it is his responsibility to put the world to rights? to restore the disjointed frame of things to its true shape? No one but himself. It is entirely self-imposed burden of cleansing the world that he now groans under (Edwards 45).

亡霊がハムレットに課した責務とは、“Revenge his foul and most unnatural murder” (1.5.25)という台詞に見られるように、殺害された父のための復讐であった。しかし、ハムレットは、クローディアスという害悪をデンマークから取り除くことで、先王が統治していた頃の状態に戻すという任務を自ら課してしまう。つまり、ハムレットは、殺害された父の復讐を果たすことよりも、国家の問題として、「外れてしまった世の中の関節を元に戻すこと」に主眼を置いているのである。

次に、第四独白を分析することによって、デンマークの国家の問題に直面して悩むハムレット像を検討していきたい。

To be, or not to be, that is the question:
Whether 'tis nobler in the mind to suffer
The slings and arrows of outrageous fortune,
Or to take arms against a sea of troubles
And by opposing end them? To die—to sleep,
No more; and by a sleep to say we end
The heart-ache and the thousand natural shocks
That flesh is heir to: 'tis a consummation
Devoutly to be wish'd. To die, to sleep; (3.1.56-64)

ハムレットは「生きるべきか、死ぬべきか」というふたつの選択肢の間で思い悩む。“To be”は直後の“in the mind to suffer / The slings and arrows of outrageous fortune”を指し、この世の荒れ果てた状況を受け入れじっと耐え忍んで生きていくことを意味する。また、“not to be”は、“to take arms against a sea of troubles, / And be opposing end them”を指し、この世の中が抱える山ほどの問題を解決するために武装して戦うことであり、それはハムレットの死を意味する。⁹したがって、「死ぬべきか」と言っても第一独白で吐露したような消極的な自殺願望とは決定的に異なっている。

一幕五場で彼が自分に課した使命は「外れてしまった世の中の関節を元の正しい状態に戻すこと」であったが、この世の中とは、「暴虐な運命の投石と矢に耐え忍」ばなければならない状況にある。それは、国王殺しのクローディアスが王位に就き、兄であった亡き王の妻ガートルードと近親相姦的な関係を結んで、デンマークを統治している世の中である。それによって、デンマークでは何かが腐り（“Something is rotten in the state of Denmark”）、デンマークは牢獄となり（“Denmark’s a prison” [2.2.243]）、デンマークの空気は腐って悪疫の蔓延る集合体（“a foul and pestilent congregation of vapours” [2.2.302-303]）となっている。これは、クローディアスによってもたらされたデンマークの病である。デンマークの中心部分、つまり国家の心臓部分が病に侵されていることで、ハムレットならびにデンマークの〈心臓〉は痛ましい（“The heart-ache”）のである。この病を放っておくことが“To be”であり、それは、デンマークにとって「非常に長い惨禍を生み出してしまう」（“makes calamity of so long life”）ことになり、最終的に、〈心臓〉を冒されたデンマークの死は免れない。

一方、問題解決のために武力を行使すること、つまり、クローディアスという害毒をデンマークから取り除くことが“not to be”である。笹山隆が指摘するように、ハムレットが神によって禁じられている復讐を遂げた場合、「復讐者自身は罪の値としての死を免れ」ることはできなくなる（21）。復讐を果たしたハムレットも死の運命にあり、国王とその王位継承者を無くしたデンマークは存亡の危機に陥ってしまう。

注意すべきは、ハムレットのディレンマが個人的な問題ではないということである。たとえば、この独白において、「復讐」（“revenge”, “vengeance”）という語はまったく用いられず、また、一人称単数の形で語られない。そして、「ハムレットの選択はこの国全体の健康にかかわることだ」（“his choice depends / The sanity and health of the whole state” [1.3.20-21]）というレイアーティーズの台詞に明らかに、王位継承者であるハムレットの決定は、デンマークのその後（健康）を大きく左右してしまう。それゆえに、彼は自らの選択に対して慎重にならざるを得

ない。しかし、この時点において“to be”、“not to be”のどちらを選択しても、ハムレットには、瀕死のデンマークを救うことが不可能であり、そして動くこともできない。にもかかわらず、王位継承者としてデンマーク国家の混乱を鎮静することが彼の使命であり、その困難さゆえにハムレットは悩むのである。

ここでは、デンマークの次期国王としてのハムレットが、死に瀕する国家を前に、どのように考えるのかを検討した。彼の悩みは、父を殺された子としての個人的な問題にとどまらず、王位後継者としてハムレットが憂えるデンマーク国家全体の問題へと発展している。ハムレットは、この未来のないデンマークを救うために立ち上がろうとするものの、その困難さに直面して思い悩むのである。このように、もはや手遅れというほどの重病に冒されているデンマークであるが、その病に処方できる薬はあるのであろうか。

4. デンマークの治療薬

ハムレットは、デンマークの王位継承者として「外れてしまった世の中の関節を元に戻すこと」で、デンマークを再生に導くという責務を負っている。しかし、国王殺害が可能であるにしても、あるいは、不可能であるにしても、デンマークの死が必然であることをハムレットは知る。ここにハムレットのディレンマがある。ここでは、ハムレットが国王殺害に至る契機を確認し、死に瀕するデンマークを救う機会を検討する。デンマーク再生への活路は、いったいどのように開かれるのであろうか。

ハムレットが国王殺害を果たすのは、五幕二場の剣試合の場においてである。しかし、このクライマックスで、突然、国王殺害が可能となるというよりも、むしろ国王殺害が必至となるように周囲の状況が整っていくと思われる。そこで、まず、剣試合の場に至る経緯を確認することから議論をはじめよう。

四幕四場において、ハムレットは、“We go to gain a little patch of ground / That hath in it no profit but the name” (4.4.18-19) とフォーティンブラスの率いる軍隊が、名誉のためだけに、ほんの僅かな土地を求めて行進しているのを見る。ハムレットは、野心に燃えるフォーティンブラスの行動力に感嘆する。高橋と河合によれば、このフォーティンブラスの行為は、最終場でハムレットがフォーティンブラスを次期国王に推挙する理由になっているという。

[フォーティンブラスは] 先代ハムレット王に父を殺された復讐のために軍隊まで組織しながら、誓言を守ってデンマーク攻撃を取り止め、デンマーク領を

通過してポーランドへ侵攻する。…（中略）…フォーティンブラスは溢れる情熱を理性によって制御し、暴挙を避け、名譽のための行動を追い求める。その意味で、フォーティンブラスこそ、激情と理性のバランスがとれた理想的な人物であり、ハムレットにしてみれば最も尊敬すべき人物ということになる。（解説 36）

フォーティンブラスの遠征シーンが挿入されることによって、理想的な人物像としてのフォーティンブラスが浮かび上がる（河合 95）。クライマックスを前に、デンマークの未来のために、ハムレットが安心して王権を委ねられる人物としてフォーティンブラスが提示されているのである。健康的な次期国王が存在すれば、ハムレットが行動を起こして死を迎えること（“not to be”）になっても、デンマーク国家の存続は可能となるだろう。

一方、四幕七場において、国王は、レイアーティーズがハムレットに殺害された父親の復讐を求めているのに乗じて、剣試合を催すことを決める。この剣試合は、表向きには、中世の騎士道的な戦いの形をとっているが、誰にも怪しまれることなく（“for his death no wind of blame shall breath” [4.7.65]）、ハムレットを暗殺するために仕組まれたものである。レイアーティーズは、ハムレットの死を確実にするため、猛毒を塗った剣で試合に臨むことを決める。国王は、計画の露呈（“our drift look through our bad performance” [4.7.150]）を避けるためにさらなる策を弄し、ハムレットのために聖杯（“a chalice”）という名の毒杯を用意しておくことにする。国王が秘密裏に荷担することで（“this project / Should have a back or second” [4.7.151-152]）、試合は、騎士道的な一対一の戦いではなく二対一の戦いとなる。しかも、剣を用いる伝統的な騎士の試合に、毒薬という近代的な罠が仕組まれている。つまり、この試合は、騎士道的な戦いの形をとっていながら、騎士道的な戦い方がはじめから否定されているのである。

クロードディアスとレイアーティーズがハムレットの心臓を狙っていることと呼応して、ハムレットは、剣試合を前に“how ill all's here about my heart”（5.2.208）と胸騒ぎを覚える。しかし、彼は、死ぬ覚悟を決め（“The readiness is all” [5.2.218]）、自然にまかせる（“Let be” [5.2.220]）ことにする。ハムレットの死が予感される中、物語は一気にクライマックスに突入する。

このように、剣試合に至るまでに、健康的なフォーティンブラスの存在とハムレットの死への覚悟によって、デンマーク再生への道標が示される。ハムレットが行動を起こすための準備が整い、あとは、国王を殺害するチャンスが自然に到来する瞬間を待つだけである。そして、いよいよ『ハムレット』最大の見せ場となる剣

試合が始まる。次に、試合の経過を確認し、国王殺害が必至となる状況がどのように整っていくのかを考察したい。

ハムレットとレイアーティーズの剣試合は、クローディアスの祝辞をもって開始となる。

The King shall drink to Hamlet's better breath,
And in the cup an union shall be throw
Richer than that which four successive kings
In Denmark's crown have worn... (5.2.268-271)

祝辞の中で国王は、ハムレットが一本とった時点で、デンマークの四代の国王が王冠につけたものよりも高価な“union”を杯の中に入れることを約束する。杯に“union”を入れる国王の行為には、どのような意味があるのだろうか。『ハムレット』が上演された当時の文化を視野に入れながら、国王の行為の意味について考えていく必要があるであろう。

第一に、“union”を杯の中に入れることは、国王に相応しい高貴な行為であった。“union”とは「無二の宝石」という意味で、王冠を飾るような大きくて質の高いパールのことである (5.2.269 註)。¹⁰ 「無二の宝石」である“union”を杯に入れる行為は、クレオパトラが、一国の財産に匹敵するほどの価値のあるパールを杯に溶かして飲んだという伝説に由来する。¹¹ それは、プリニウスの『博物誌』に記載されており、シェイクスピアの時代にも、広く知られていた有名な故事である。たとえば、ベン・ジョンソンの『ヴォルボーン』(1606 年)においても、豪奢の絶頂の事例として、“each [pearl], more orient / Than that the brave Egyptian queen caroused: / Dissolve, and drink'em” (3.7.191-192)¹² と言及されている。また、このクレオパトラの逸話の影響を受け、エリザベス朝期において、相手への敬意や愛情を示すために、質の高いパールが祝杯に入れられることがあった。たとえば、イギリス人豪商トマス・グレシャムは、エリザベス女王への敬意の証として 1571 年に、一万五千ポンドの価値のあるパールを杯に溶かして飲んだという。¹³ 国王は、「無二の宝石」であるパールを入れた杯を、ハムレットに褒美としてとらせることを約束する。この寛大な提案は、華麗な宮廷内の催しを始めるのに相応しいものと言えるであろう。

第二に、国王は、ハムレットのための薬として、杯にパールを入れると考えられる。ハムレットがレイアーティーズに一撃を加えるや否や、“Stay. Give me drink, this pearl is thine. / Here's to thy health. Give him the cup” (5.2.284-285、下線部引用者)と、クローディアスは、約束通り、パールの入った杯をハムレットに与えようとする。

る。ここで「健康のために」とされるのは、シェイクスピアの時代には、“Pearls are restorative” (Tilley P166) という諺が一般的であったことによる。非常に高価であったために一般には普及していなかったものの、パールは薬として用いられ、とくに、心臓の病に効く薬として広く信じられていた。¹⁴ たとえば、『ヴォルポーネ』においても、“the passion of the heart. / Seed-pearl were good now, boiled with syrup of apples” (3.4.51-52) というように、心臓の発作の薬としてりんごのシロップで煮た小粒のパールが紹介されている。¹⁵ つまり、ここでは、パール入りの杯によって、激しい立ち回りで息を切らしている (“scant of breath” [5.2.290]) ハムレットの動悸を抑える効果が期待されている。

また、パールには強心剤としての効果があり、そこから憂鬱症の治療薬となると信じられていたことは、特記に値するであろう (Kunz and Stevenson 312)。アナ・K. ナードは、クロードィアスがハムレットに与えるパールを憂鬱症の治療薬とみなしている。ナードによれば、レイアーティーズとハムレットの決闘を見物する観客、そして当時の劇の観客は、クロードィアスが杯の中にパールを入れる行為は、ハムレットの憂鬱症を治すためのものと理解したと考えられる (39)。¹⁶ したがって、クロードィアスの差し出すパール入りの杯は、心臓のための薬、あるいは、憂鬱症のための薬であったと考えられる。

第三に、国王がパールを杯に入れる行為は、杯に毒を盛るカムフラージュであった。国王に差し出されたパール入りの杯に対してハムレットは、“I’ll play this bout first” (5.2.286) と断り、試合を続行する。その代わりにガートルードが “The queen carouses to thy fortune, Hamlet” (5.2.292) とその杯を飲む。そして、ハムレットがレイアーティーズの毒剣で刺され、激闘の中、ハムレットは、入れ替わった毒剣でレイアーティーズを刺し、両者相撃ちとなる。そしてその瞬間、王妃は倒れてしまう。

HAMLET. How does the queen?

KING.

She swoons to see them breed.

QUEEN. No, no, the drink, the drink! O my dear Hamlet!

The drink, the drink! I am poison’d.

Dies (5.2.314-316)

ここで、ハムレットが飲むはずであった杯には、毒が盛られていたことが発覚する。いつどのようにして毒が杯に盛られるかについては、テキスト上では明らかにされていない (Hibbard 5.2.234 註)。従者がワインを用意し、国王が最初にそれを口にしているので、ワイン自体に毒が入っている可能性は低い。したがって、国王が杯に毒を盛るタイミングについては、彼がパールを杯に入れる行為と関連付けて

説明されうる。たとえば、ジョージ・スティーブンスによれば、“Here is to thy health”の台詞を言いながら、“Under pretence of throwing a pearl into the cup, the king may be supposed to drop some poisonous drug into the wine” (Malone 5.2. 註 5) のであり、国王は本物のパールではなく毒薬を杯に投入することになる。エドワード・カペルの場合は、“this pearl is thine; / Here is to thy health”の後に“*drinks, and puts Poison in the Cup*”というト書きを付けているので、国王はハムレットの健康を祝して杯を飲んだあと、それに毒を入れてハムレットに渡すことになる (Capell 131)。アーデン版の編者ハロルド・ジェンキンスは、「国王は自ら杯を飲んだあと、パールを注ぐ」とし、このパールを毒薬とみなしている (5.2.284 註)。状況については想像するほかないのだが、おそらく国王は、毒を塗ったパールを予め用意しておき、祝杯をあげる際に、皆の前でそれをハムレットの飲むべき杯に投入したと考えられる。

前述したように、国王がレイアーティーズの毒剣に加えて毒杯を用意したのは、失敗によって策略が露呈することを避けるためであった。つまり、国王は、ハムレットに毒を盛る行為を隠蔽するために、毒を塗ったパールを用意したのである。パールであれば、豪華な褒美として、また、健康回復の薬として、周囲に疑われることなく杯の中に入れることができる。しかし、国王の意表をつき、王妃が毒杯を口にして陰謀の犠牲となってしまう。そして、“The foul practice / Hath turn'd itself on me” (5.2.323-324) と、自ら用意した毒剣で死を招いたレイアーティーズが “Thy mother's poison'd. / ... The King - the King's to blame” (5.2.325-326) と国王の関与を暴露する。皮肉にも、国王が杯に毒を盛った行為がかえって仇となり、国王の策略が公の場に露顕する結果となる。

いよいよ舞台は修羅場を迎える。試合が一对一ではなく二対一であったこと、そして、毒が仕込まれていたことを知ったハムレットは、その陰謀の仕掛け人である国王に刃を向ける。しかし、絶対的タブーであった国王殺害がどのようにして正当化されるのであろうか。そこで、ハムレットによる国王殺害が可能となる瞬間を詳しく見ていきたい。

HAMLET. The point envenomed too! Then, venom, to thy work.

Wounds the King.

ALL. Treason! Treason!

KING. O, yet defend me, friends. I am but hurt.

HAMLET. Here, thou incestuous, murd'rous, damned Dane,

Drink off this potion. Is thy union here?

Follow my mother.

King dies

LAERTES.

He is justly serv'd;

It is a poison tenper'd by himself. (5.2.326- 333, underlines mine)

まず、ハムレットが国王を二種類の方法で殺害することに着目しよう。剣先に毒が塗られていたことを知ったハムレットは、その毒剣で国王を刺し、さらに、毒杯を無理やり彼に飲ませる。¹⁷ 毒剣を受けたクロードィアスがじきに死ぬということが明らかであるにもかかわらず、ハムレットはクロードィアスに毒杯を無理に飲ませ、国王に弁明の余地を与えることなくその死を早めさせてしまう。“Drink off this potion”という台詞は、たとえばカペルに“the expression is figurative”と解釈されるほど、野蛮である (Capell, *Notes and Various Reading* 149)。しかし、ほとんどの編者が認めるように、この台詞は比喩ではなく、ハムレットは、実際に毒杯を国王に飲ませるものと考えられる。たとえば、高橋と河合は、「復讐は自分のみならず母のためでもある以上、自らの死をもたらした毒剣と同時に母の死をもたらした毒杯を、クロードィアスにも味わわせる必要がある」としている (5.2.329)。すなわち、国王がハムレットと王妃の死をもたらしたことが、ハムレットにとって国王に報復を果たす契機となり、ハムレットは、国王に毒剣を仕向けるのみならず毒杯を飲ませるのである。

しかし、留意すべきは、ハムレットが国王を刺す瞬間は“Treason! Treason!”と謀反として騒がれる一方で、毒杯を飲ませる瞬間は“He is justly serv'd”と、彼の行為が正当化されることである。さらに、ハムレットが息を引き取ると、ホレイシオによって“flights of angels sing thee to thy rest”と国王を殺害したハムレットの天国行きが予告される。またフォーティンブラスの命令によってハムレットは、兵士にふさわしく、また王族にふさわしく丁重に葬られる。このように、ハムレットが国王を弑す大逆罪としての行為は、完全に看過されてしまう。ここで、パール入りの杯を国王に飲ませる行為が、ハムレットの国王殺しの正当化に関係していると考えられないだろうか。

ハムレットが国王に飲ませるパール入りの杯に注目すれば、ここで毒薬として用いられたパールが結果的に、デンマークの心臓の病を治療する薬となったことが確認できる。たとえば、パールをハムレットの憂鬱症の治療薬とみなしたナードは、国家の腐敗の治療薬としてのパールの機能に着目している。

The pearl, in show a cure for Hamlet's melancholy, would in fact poison him. As a poison, however, it would still be a cure for the hectic that rages in Claudius'

blood by eliminating Hamlet. When the prince, poisoned by the sword, pours the poisoned wine down the king's throat with a pun, "Is thy union here?", the poisoned pearl again metamorphoses into a cure. Although the pearl does not cure Hamlet's melancholy, it does provide a radical cure for the rottenness in Denmark. By poisoning both Gertrude and Claudius, the pearly union purges the state of the source of its disease — the "luxury and damned incest" of the king's mental union. (Nardo 42)

クローディアス とガートルードの関係は、贅沢にまみれ、近親相姦的な汚らしい結びつきであり、それが源である国家の病はパールによって治されるのであるとナードは結論付ける。さらに、憂鬱症だけでなく心臓病の薬としてのパールに着目すれば、パールがデンマークの心臓病の薬として機能していると言えるだろう。また、『イメージ・シンボル事典』によれば、パールには、異常なるものを純化する意味があるという。クローディアスによって用いられたパールは、結果的に国家の異常な状態を純化するのに役立ったと言えるだろう。クローディアスが毒薬として用意したパールは皮肉にも、彼を殺害する毒薬となり、さらに、クローディアスがもたらした病を治療する薬として機能してしまうのである。

しかしながら、上演当時のイングランドにとくに注目した場合、パールには、治療薬としてだけでなく、ほかにも社会的な意味が含意されているように思われる。国王が毒を塗ったパールを杯に入れる行為と、ハムレットがパール入りの杯を国王に飲ませる行為の意味をそれぞれ検討するために、パールとは何だったのか跡付ける必要がある。

パールは、古代から権力者に愛され、その王冠を飾ってきた。貝の中に姿を隠しているパールは、天から落ちてきた雫がもとと考えられ、神聖なものが地上に降りて形となった、いわば天からの贈り物であった (Joyce and Addison, 26)。きわめて稀少であらゆる贅沢品のうちで最も高価な宝玉であり、ごく限られた者だけがパールを手にすることができたのである。とくに宝石の切削、研磨の技術がなかった頃、それらが必要な宝石類より自然のままですでに完全な輝きを湛えるパールが好まれた。古代から権力者たちはパールを身に付けることによって、その富と権力を示したのである。

ルネサンス期のヨーロッパにおいて、権勢を誇った名だたる王侯貴族は、とくにパールに熱中した。そしてそれは、新大陸の発見によってもたらされた流行であった。スペイン王室を後ろ盾に新大陸を発見したクリストファー・コロンブスが、1498年、中米で豊富なパール貝生息地を発見し、以降、スペインによる新大陸パー

ルラッシュが始まったのである。¹⁸ 王侯貴族に人気の高いパールの需要を充たすため、毎年何百ポンドものパールが新大陸からヨーロッパに運ばれた。¹⁹ ヨーロッパの王侯貴族は、虚栄と権力誇示のために、スペインからもたらされたパールで、彼らの宝庫を満たしたのであった。

とくに、イングランドのエリザベス女王は、世界の歴史上、最も熱狂的なパール愛好家として知られている。あらゆるガウン、冠、かつら、宝飾品は、パールで施され、事実、頭の先から足の先まで黒と白のパールで飾り立て、エリザベスは、夜昼となくパールを身につけた (Joyce and Addison, 95)。女王の肖像画には例外なく、彼女を飾り立てる夥しい量のパールを確認することができる。人間の手で研磨されることなく輝きを湛えているパールは、誰の手にも触れられていないという点で、処女性と強く結び付けられてきた。バビロンの娼婦（ローマ教皇）と対極に置かれるエリザベス女王の処女性がパールによって強調されるのである。古代から王冠を飾る宝玉であるパールは、権力の雰囲気醸し出し、またその純潔のイメージから、世界にエリザベス女王の穢れなさを思わせるのに貢献した。いわば、パールは彼女のトレードマークであったのである。

『ハムレット』が上演されていた頃は、パールの女王エリザベス一世の治世である。その光と輝き、類稀なき価値によって、パールは、君主の王冠を飾るのに最も相応しい宝飾品であった。それは、君主権力の象徴であり、王冠のシネクドーキとして機能していた。つまり、王冠を飾るパールが君主権力という意味を包含するわけだが、それでは、クローディアスがパールに毒を塗る行為はどのように解釈されるべきだろうか。国王が君主という意味のパールに毒を塗る行為は、いわば自殺行為であって、それがクローディアスの死を招いたと言えるのではないだろうか。国王が自ら死を招くのであれば、ハムレットには責められるべき咎はなくなる。

さらには、最終場において、国王クローディアスがパールに毒を塗る行為は、彼が先王ハムレットを殺害した事件と響きあっていると思われる。剣試合は、国王が〈庭〉に侵入して午睡中の先王を毒殺した時と同様、伝統的な騎士道精神が完全に否定されて開始する。そして、先王の王冠をとって耳から毒薬を注ぐ行為（しかもこの行為は、劇中劇で役者によって再現されている）は、国王がパールに毒を塗る行為に呼応する。〈庭〉で先王を毒殺して王座と王妃を奪った国王は、今度は舞台上で、君主という意味のパールに毒を盛り、国王自身と王妃の命を奪って一族の断絶を招く。

しかし、宮廷は、〈庭〉とは異なり、内部で行われる犯罪が誰にも見つからない空間ではない。先王毒殺は、〈庭〉（私的空間、舞台の外）で人目に触れずに行われて成功したが、宮廷（公的空間、舞台上）でパールに毒を塗った行為は、公に露呈し

て失敗せざるを得ないのである。劇のはじめにハムレットが“Foul deeds will rise, / Though all the earth o'erwhelm them, to men's eyes” (1.3,157-158) と予言していたように、剣試合における国王の行為によって、〈庭〉で大地に呑み込まれていた不正が人の目に触れる瞬間がもたらされる。先王殺しの状況を公然の場で再現した国王は、正当な裁きを受けることになる。

また、ハムレットの代わりにパール入りの杯を飲む王妃が、結果として、国王の犯罪を暴露することは興味深い。王妃が毒薬としてのパールを飲んで死ぬことによって、ハムレットの国王に対する行為を正当化させることになる。さらには、王妃が治療薬としてのパールを飲むことによって、彼女自身の腐敗が純化されることになる。王妃は、貞操を捧げた先夫と死に別れた直後に、その情欲に任せて先夫の弟と近親相姦的な関係に陥り、〈庭〉の荒廃を助長させていた (...spread the compost on the weeds / To make them ranker [3.4.153-154])。しかし、最後に至って、彼女の拭い去れない穢れ (“such black and grained spots / As will not leave their tinct” [3.4.90-91]) がパールによって浄化されるのである。このように、王妃にとってのパールは、毒薬であると同時に、救済をもたらす治療薬であったと考えられる。

最期の言葉も許されず殺害された先王の状況を再現するかのようには、ハムレットは、毒杯を無理やり国王に飲ませることで、彼に一言も弁明させることなく殺害する。この瞬間が、ハムレットに求められていた国王の地獄墮ちが決定する「もっとおそろしい機会」 (“a more horrid hint” [3.3.88]) である。毒薬として用意されていたパールは、結果的にデンマーク王室を浄化し、その心臓部の病を治療することになる。

ハムレットの心臓が砕ける (“Now cracks a noble heart” [5.2.364]) 前に、彼は、健康的なフォーティンプラスに王権を委ねることで、デンマークの〈心臓〉を救うことに成功する。フォーティンプラスの治める健康的なデンマークの未来が示唆され、最後にハムレットは、「世の中を元の正しい状態に戻す」という責務を果たして息を引き取るのである。彼は、デンマークの未来をつなぎ、王子としての彼の責任を果たす。その意味で、ハムレットは、自らを犠牲にしてデンマークを再生に導いた救世主であり、ヒーローであった。

本稿では、死に瀕するほどの病に冒されたデンマークが再生に向かう契機を検討し、デンマークの病を治すために処方される薬を明らかにすることを試みた。クローディアスがパールに毒を塗る行為が、先王に毒を盛った事件の再現となり、秘密裏に行われた犯罪は、公の場で繰り返されることによって、正当に裁かれることになるのである。『ハムレット』においてパールは、毒薬と同時に治療薬として機能する、まさにファルマコンであった。

パールは、デンマーク王家一族の死とデンマークの再生を同時にもたらした。生と死を同時に招来したパールは、生（“to be”）と死（“not to be”）を同時に避けることにもなる。デンマークの病を放ったままハムレットが生き続けること（“to be”）も、次期国王としてのハムレットが行動を起こして死ぬことでデンマークが存続の危機に陥ること（“not to be”）もなく、ここに、「生きるべきか死ぬべきか」というハムレットの最大のディレンマが解消され、『ハムレット』の幕は閉じる。

『ハムレット』の最大の魅力は、そのテキストに多くの謎が含まれ、多様な読みが可能とされることであろう。四百年の時を超え、百人百様の読み方がなされてきた『ハムレット』であるが、本稿によって、『ハムレット』の読みのひとつのオルターナティヴを提示することができれば、幸いである。

注

- 1 たとえば、五幕一場（墓掘りの場）に見られるような、頭蓋骨を手にして瞑想する若者のイメージは、“*memento mori*”の伝統を引いており、エリザベス朝の観客には、絵画などによって既にお馴染みであった。詳しくは、Frye 206-228 を参照。
- 2 Shakespeare の *Hamlet* が書かれた 1601 年より少し前の 1594 年、別の作者による *Hamlet* がすでに存在していた。後に *Ur-Hamlet* と呼ばれるものであり、テキストは現存していないが、当時の記録や同時代人による言及などから上演の事実が確かめられている。*Ur-Hamlet* の作者を Thomas Kyd とする説が一般的であり、Kyd の復讐悲劇 *The Spanish Tragedy* は *Ur-Hamlet* に類するものと想像されている。そして、Shakespeare の *Hamlet* は、*Ur-Hamlet* や *The Spanish tragedy* の影響を強く受けていると言われている。
- 3 厳密には、デンマークがノルウェーに吸収される。しかし、もともと先代の王たちの一騎打ちによって、ノルウェーはデンマークに吸収されていた。クローディアスがノルウェーを“brother”と呼んでいるように、「デンマークとノルウェーが一体化している」（高橋、河合 2.2.59 註）状態にある。そして、「ハムレット王家が断絶した場合は領土はフォーティンブラス王家のものとなる」（高橋、河合 5.2.392 後註）わけで、フォーティンブラスがデンマークの国王となるのは正当である。したがって、本稿では、ハムレット王家が断絶しても、フォーティンブラスの承継によって、デンマーク国家は存続していくと考える。
- 4 河合祥一郎によれば、この作品に登場する三人の若者は、理性と情熱の間を揺れ動くハムレットの似姿をとっているという。ホレイシオは理性を体現し、レイアーティーズは行き過ぎた情熱を表す。そして、理性と情熱のバランスのとれた理想的な人物がフォーティンブラスとされる。詳しくは、河合 85-96 を参照。
- 5 以下、*Hamlet* からの引用は、Harold Jenkins 編の *The Arden Shakespeare* とし、文中括弧に、幕、場、行数を示す。
- 6 *Hamlet* の根本的な材源テキストは、12 世紀末にデンマークの歴史家 Saxo Grammaticus が *Historiae Danicae* (c. 1200) に収めた王子 Amelth の復讐物語とされる。Francois de Belleforest は、*Histoires Tragiques* 第 5 巻 (1580) に Saxo の物語のフランス語による翻案を収めた。(Bullough

10-11、後藤 7-12、高橋、河合 27-29、141 参照)

- 7 たとえば、エリザベス女王のリッチモンド宮殿の庭は、煉瓦塀に囲まれ、内側には 62 本の果樹が植えられていたという (川崎 14-15)。
- 8 しかもこれらの台詞が、主要登場人物ではない Francisco と Maecellus によって発せられることによって、客観性を帯びていると思われる。
- 9 “To be, or not to be” は、シェイクスピア劇の中でもっとも人口に膾炙する台詞であろう。その解釈は数多く存在するが、ここでは、Edwards 47-50、河合 95-98、を参考にした。
- 10 OED は “union” を “A pearl of large size, good quality, and great value, especially one which is supposed to occur singly” と定義している (sb.2)。ローマ時代、パールは「ユニオ」(“unio”)と呼ばれていたが、この由来はプリニウスの『博物誌』に記載されている。「その全価値はその光輝、大きさ、丸さ、滑らかさ、そして重さにあるのだが、それらはいずれも、まったく同じ真珠は二つとない稀な性質なのだ。これがローマの贅沢が真珠に「ユニオ」〈無二の宝石〉という名を与えたゆえんである」(第 9 巻 56 [112])。
- 11 プリニウス 第 9 巻 59 [121]
- 12 Ben Johnson, *Volpone*. The New Mermaids Edition. Ed. Philip Brockbank. (London: A & C Black)
- 13 Jenkins 5.2.69 後註、Kunz 314
- 14 George F. Kunz と Charles H. Stevenson によれば、“The Wise” という通称で知られる Alfonso X of Castile (1221-1284) は、パールの薬効性についてこう記している。

The pearl is moat excellent in the medicinal art, for it is great help in palpitation of the heart..., and in every sickness which is caused by melancholia, because it purifies the blood, clears it and removes all its impurities. Therefore, the physicians put them in their medicine and lectuaries, with which they cure these infirmities, and give them to be swallowed. (311)。
また、実際に薬としてのパールを服用したのは、Charles IV (1368-1422) や Lorenzo de' Medici (1448-1492) などである。(313)

- 15 Kunz と Stevenson は、初期近代イングランドにおいて、治療薬としてのパールを紹介している主な文献をあげている。その中で、Francis Bacon は “Historia Vitae et Mortis” (1623) において、レモン水で溶かしたパールを延命薬として紹介しているという。(313)
- 16 Anna K. Nardo は、パールの入った飲み物を、Robert Burton が *Anatomy of Melancholy* (1632) の中で、憂鬱症の治療薬として提案している金などを溶かした “strong drink” の範疇に含まれるとしている。
- 17 Hibbard は、“He forces Claudius to drink” というト書きをつけて、ハムレットが国王に無理やり毒杯を飲ませる様子を強調している。(5.2.279)
- 18 Kunz and Stevenson 225, 321. Joyce and Addison
- 19 Kunz と Stevenson、また、Joyce と Addison は、スペインの発展を支えたのは、新大陸からもたらされたパールのおかげであるとする。スペインの入植者たちは、パール採取のために、原住民者を奴隷化し、長時間過酷な条件下での仕事を強制した。鯨の襲撃、出血、赤痢などによって、何千人もの奴隷が死んだ。パール採りの人数が減るとスペイン人は近隣の村落を襲い、新しい奴隷をさらって、パールを採らせた。16 世紀を通して、スペインは、パールにのぼせているヨーロッパの主要供給者であり、新世界から暴力で奪った富のおかげで、世界最強国となったのである。

本稿で参照した『ハムレット』のテキスト

- The Arden Shakespeare. ed. Harold Jenkins. 1982. London: Mathuen; London: Thomson Learning, 2001
- The New Cambridge Shakespeare. ed. Philip Edwards. 1985. Cambridge: Cambridge University Press, 2003
- The Oxford Shakespeare. ed. G. R. Hibbard. 1987. Oxford: Oxford University Press, 1998
- The Plays and Poems of William Shakespeare, Vol.9. ed. Edmond Malone. 1790. London; New York: AMS Press, 1968
- The Works of Shakespeare, Vol. 10. Ed. Edward Capell. 1767-68. London; New York: AMS Press, 1968
- 大修館シェイクスピア双書、高橋康也、河合祥一郎編 東京：大修館、2001 年

引用文献

- Bullough, Geoffrey. *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, Vol. 7. 1973. London: Routledge and Kegan Paul, 1975.
- Capell, Edward. *Notes and Various Readings to Shakespeare*, Vol. 1. 1779. London; New York: AMS Press, 1973.
- Frye, Roland Mushat. *The Renaissance Hamlet: Issues and Responses in 1600*. Princeton: Princeton University Press, 1984.
- Johnson, Ben. *Volpone*. The New Mermaids Edition. Ed. Philip Brockbank. London: A & C Black,
- Joyce, Kristin and Shellei Addison, *Pearls: Ornament and Obsession*. New York: Simon and Schunter, 1993.
- Kunz, George Fredrick, and Charles Hugh Stevenson. *The Book of the Pearl*. 1908. New York: Dover Publications, 2001.
- Kyd, Thomas. *The Spanish Tragedy*, Revels Student Edition. ed. David Bevington Manchester: Manchester University Press, 1988.
- Nardo, Anna K. "Here's to Thy Health: The Pearl in Hamlet's Wine" *English Language Notes*, December 1985.
- Spurgeon, Caroline F. *Shakespeare's Imagery and What It Tells Us*. 1935. Cambridge: Cambridge University Press, 1966. 316-320.
- Tilley, Morris Palmer. *A Dictionary of the Proverbs in England in the Sixteenth and Seventeenth Centuries: a Collection of the Proverbs Found in English Literature and the Dictionaries of the Period*.
- G. ウィルソン・ナイト「死の使者『ハムレット』論」、『煉獄の火輪—シェイクスピア批評の解釈』河崎征俊ほか訳、東京：オセアニア出版、1981 年。29-99 ページ。
- 河合祥一郎『謎解き「ハムレット」—名作のあかし』東京：三陸書房、2000 年。
- 川崎寿彦『庭のイングランド—風景の記号学と英国近代史』名古屋：名古屋大学出版会、1983 年。
- 後藤武士『ハムレット研究』東京：研究社、1991 年。
- 笹山 隆「悲劇的ヴィジョンと〈復讐〉」『エリザベス朝演劇—伝統とヴィジョン』京都：山口書店、1982 年。19-32 ページ。
- 『プリニウスの博物誌』中野定雄訳、雄山閣、東京、1986 年。